

ロツツエ 妥當說の由來 (承前)

錦田 義富

六

認識對象性の根據の客觀實在に求めてはならぬことを根本的に確立したのはカントの不朽の功績である。然し之を主觀の綜合作用統覺作用に基かしたものは、猶心理學を以つて理性批評の基礎となすものとの譏を免れない。純粹論理的者 (das rein Logische) は内外何れの意味に於ても實在的要素を混じてはならぬ。總ての心理的者を嚴に捨象して考へねばならぬ。之れヘルバルトの客觀的妥當說の發足點である。彼の論理學は實に斯る純粹論理的者の本質を確定することを以つて其第一課題となすものである。(以下の叙述は主として Hauptpunkte der Logik. 1808. Sämmtliche Werke, I. S. 467ff. Lehrbuch Zur Einleitung in die Philosophie. 1813. S. W. I. Psychologie als Wissenschaft. 1825. II. Theil S. W. VI. の三書に依る。)

ヘルバルトに従へば哲學は科學及日常經驗の提供する所與の概念の仕上げである (Philosophie ist Bearbeitung der Begriffe. S. W., I, 47)。見聞覺知は生活の上に獲られ、所與を蒐集し事實を確保するは科學及歴史の任である。所與にして似而非概念たるに留まり本來の概念 (ein Begriffenes, notum, notio) ならぬものあらば、之を純粹なしめ、正しき概念たらしむることも科學の職分である。哲學は仕上げに先立ち正しき所與、確かなる事實を科學及生活より受取らねばならぬ。此意味に於ては特に哲學のみに所屬の對象は無いのである。神秘的直観によりて特異なる對象を哲學に認定せんとするが如きは謬りである。神秘的直観も哲學にとつては單に一の所與の事實たるに過ぎないと (I., 45ff)。經驗の自律を力説せる點より云へば、フヒテ、ヘーゲル等よりも彼の方が遙に批評哲學の立場に忠なるを見るのである。

所與の概念の仕上げの仕方によつて、哲學は論理學、實踐哲學 (Ästhetik) 形而上學の三大部門に分たれる。論理學の目的は所與の概念を明晰判明 (klar und deutlich) ならしむるに在る (I., 47f)。夫れでは論理學に取扱ふのは所與の概念其儘であるかと云ふに勿論左うでは無い。其關心の方面は嚴密なる意味に於ての本來の概念である。彼に従へば總ての思想或は概念は二つの全然異なる方面より考察することが出来る。

作用としての方面と對象としての方面と之れである。作用としての思想は全く心理的主觀的である。心理學の研究對象は此方面に横はる。而して其關心の重點は認識の發生 (Entstehung) に置かれるのである。對象としての思想が即ち本來の意義に於ける概念であつて之れこそ正しく論理學の探究すべき當體であるのである。夫は何處迄も作用と峻別して考察しなければならぬ。(Unsre sämtlichen Gedanken lassen sich von zwei Seiten betrachten; theils als Thätigkeiten unseres Geistes, theils in Hinsicht dessen, was durch sie gedacht wird. In letzterer Beziehung heissen sie Begriffe, welches Wort, indem es das Begriffene bezeichnet, zu abstrahiren gebietet von Art und Weise, wie wir den Gedanken empfangen, produciren oder reproduciren mögen. I. 77)° 同一の趣意を次の如くに言表はしてゐる。總ての概念に就て其論理的意義 (logische Bedeutung) と心理的意義 (psychologische Bedeutung) とを嚴に區別し論理學は前者の概念のみを對象とする (S. W. VI, 160)° 何れにせよ論理學にとつて最も切要なることは主觀とか作用とか云々如き一切の心理者を捨象することである (In der Logik ist es notwendig, alles Psychologische zu ignorieren, I, 78. Vlg. VI, 160f.)° 同様に實在的對象と異別することの大切なるは言ふ迄もなし (Es ist von Wichtigkeit, sich wohl einzuprägen, dass Begriffe weder reale Gegenstände, noch wirkliche

Acte des Denkens sind. I, 78)°。斯る概念を明晰判明ならしむるものは概念相互の關係之を顯現する判斷推理である。彼は斯學の課題を簡潔に定義して下の如く言ふて居る。Die ganze reine Logik hat es mit Verhältnissen des Gedachten, des Inhalts unserer Vorstellungen... zu thun; aber überall nirgends mit der Thätigkeiten des Denkens, nirgends mit der psychologischen, also metaphysischen, Möglichkeit desselben (VI, 159)°。論理的對象中基本的なのは概念及判斷である。今少しく立入つて其性質を檢覈して見よう。

ヘルバルトの概念とは、何にてもあれ吾人の思惟對象となし得るもの總てを總稱する名であつて作用を捨象した廣義の表象と同義である。されば彼は der Begriff = das Gedachte = das Vorgestellte = der Vorstellungsinhaltと使用して居るのである。たとへば赤色と云ふ表象は勿論のこと、特定形状を具へたる特定の赤の色合(Farbe)でも矢張り概念である(VI, 162)°。概念の作用や主觀に無依なることは、或一個の概念が同一人によつて幾度も繰返して又無數の主觀によつて想念されても、把捉せらるる當の概念は其爲め決して多數となることなく常に同一概念たるを見れば明らかである。アルヒメデースの研究した圓とニュートンの考へた圓とは、之を心理的主觀的に見れば二つの異なる概念である。然し論理的意義より見れば、實に彼等二人に對してのみ

ならず、總ての數學者にとつて ein einziger Begriff である。實に總ての論理的觀念は nur einmal vorhanden である。否一層切實に云へば die Begriffe sind etwas völlig Unzeitliches である (I, 467f., VI, 130f.)。尙彼が unmögliche Begriffe の實存を認めたことも注意すべき點かと思はれる (I, 82)。夫れでは一々の觀念や表象内容が主觀や作用を超越して超時間的に妥當すとは何の意であか。私は之を意味の自同性或は意味の自己保存であると思ふ。彼が觀念の論理的意義を究明した後、die erste Folge aus diesen Erklärungen ist der Satz, dass nicht zwei Begriffe vollkommen gleich können, sondern jeder gleichsam nur in einem einzigen Exemplar vorhanden ist. (I, 78) と説き、更に又二つの觀念の間に成立する種々の關係を言ふ前に、各の觀念が $A \equiv A$ として自同律を満足させて居なければならぬ (I, 81f.) と主張したる點などより推して、右の如くに解釋するのである。而して斯る論理的意義の觀念が、夫のポルツノの客觀的表象即ち表象自體と極めて近似のものなることは、上の論證の仕方によつても知らるゝ如くである (Bolzano, Wissenschaftslehre, I, 216f.)。

概念一般の特質は之れで略々明かになつた。次に問題となるは二つ或は二つ以上の概念の間の Verhältnisse である。關係としてあげられて居るのは Gemeinschaftlichkeit, Unterordnung, Verschiedenheit, Contrast 等であるが、是等に就ての彼の論述は普通の形

式論理に見るのと餘り相違は無し。唯注意すべきは彼が是等の形式を思惟必然の形式と解することを退けたる點である。論理學は eine *Naturgeschichte des Verstandes* ではないから、是等の形式を *angeborene Gesetze oder Denkformen* と見てはならぬ。夫は *diejenigen Formen der möglichen Verknüpfung des Gedachten, ... , welche das Gedachte selbst nach seiner Beschaffenheit zulässt (I, 78)* と解しなければならぬと言つて居る。彼の意は思惟形式が思惟必然の形式にはあらで當の概念内容其者に基く形式である、形式に基いて概念が可能となるのでなくて却つて概念によつて形式も可能となると云ふのであらう。妥當界の成員として認識形式よりも認識内容を重視し、前者の却つて後者によつて基礎付けられると云ふやうな考方は、獨り概念の場合のみに止まらず判断や推理の場合に於ても等しく説かれて居る處であつて (*I, 92ff, 107ff*) 正しく客觀的妥當説成立の一基石を拵へたるものと言はねばならぬ(第七節參照)。而して斯くの如く見られる形式の意義は寧ろ主觀的規整的たるに近いと思はれるのである。概念及概念關係を支配する法則としては彼は自同律矛盾排中律理由律をあげて居る。前二者に對する解釋は極めて形式的のもので、フイテ、ヘーゲル等の夫れとは著しき對照を示して居る。然しヘルバルトの論理は矛盾律を最高規範とする形式論理であると

のキンデルマンの批評は、たとひ全くの曲解誤解とは云へない迄も、少くとも甚だしき酷評であると思ふ(Windelband, *Logik in Die Philosophie im Beginn des XXsten Jahrhunderts*, 2A, 1907, 3, 184f.) 判断論は暫らく之を措き、單に概念の場合のみに就て見ても、ヘルバルトの如く純形式的に解釋したる自同律矛盾律にては、一々の概念はよく意味の自同性排他的獨立性を確保するでもあらうが、夫れさへ實は疑はしむ、概念相互の間の關係を説けない筈である。之を説くにはどうしても理由律を認めねばならぬ。實際ヘルバルトは概念論に於て既に之に言ひ及んで居るのである(183)。概念關係の成立に理由律を認めると云ふことは、比較せらるべき概念の根柢に彼等の關係を保證する普遍的者を認めることである。赤色の一々の色合の根柢には赤色一般があり、赤色青色の比較を可能ならしむるものとしては色一般がなければならぬ。唯ヘルバルトが理由律の一般概念に對する意義について明説し居ない爲めに、誤解も自然生じ易いのである(後段參照)。

一々の概念及其關係を是迄 *etwas fertiges und bestehendes* として論じたのであるが、斯る *Geltung* は元と之れ判断の成果である。概念は其論理的發生たる判断に於て初めて充分に明晰となり來るのである。さて判断にても概念の場合と同じく二つの方

面を嚴に區別して考へねばならぬ。作用の方面と對象の方面と之れである。而して茲にても亦論理學の研究對象は凡ての心理的者の混入を退けたる判斷當體に限るべきこと論を俟たぬ思惟は單に概念結合の道具たるに過ぎないのである(Das Denken ist hier nur das Mittel, gleichsam das Vehikel, um die Begriffe zusammenzuführen; auf sie selbst kommt es an, ob sie zu einander passen werden, oder nicht. Daher muss auch hier das Logische von aller Einmischung des Psychologischen entfernt gehalten werden. I, 91)。判斷論にて研究する處は主辭と賓辭との結合であるが、ヘルバルトに従へば此結合は二段に區別して考察しなければならぬ。即ち判斷は先づ jedes Subject, als solches, in Relation zu irgend einem Prädicate として、次に此關係を問とし Ja oder Nein の答を與へたる die Entscheidung der Frage として見られる。略言すれば判斷は其 Relation と Qualität との二方面を區別して研究する必要があると云ふのである(I, 92ff.)。『關係』として判斷の性質を討ぬるに夫は未だ眞偽の差別の生ぜざる思想結合である。其本質は決定の與へられざる Frage と同じである。A ist B 又は Ist A wol B? とは單に關係をあらはすものとしては區別が無い。斯る意味の論理的判斷が夫のボルツァの命題自體と同一當體を指示すること多言を須ゆずして明である(Bolz, Wissenschaftslehre, I, S. 77)。次に關係と言へば其根柢に一

の Hypothese を豫想する。主辭と賓辭との關係は常に hypothetisch のもので決して夫れだけにて absolut と言ふことは出來ない。故に A ist B と云ふ定言判斷は之を關係としての判斷と見れば常に wenn……so の關係に立つものである (I, 92f., 100f.)。彼は又此意を簡潔に説き曰く Demnach muss jedes Urtheil, als solches, hypothetisch ausfallen. "A ist B" heisst nicht, Aist, — sondern, wenn A gesetzt wird, so ist B mit gesetzt, zur Vereinigung in Einen Gedanken. と (I, 470)°。今此意を推して考ふるに A と B との關係を成立せしむる根據は A 或は B のみには存せず夫れ以外に A 及 B の根柢に横はつて居るとの意であらう。若し A と B とのみにて他を要しないならば A ist B てふ判斷は假言的ではなくて定言的絶對的と解して差支ない筈である。總ての定言判斷を假言判斷に還源するのは判斷の Rechtsgrund として一の System を想定するものである。即ち自同律矛盾律の外に理由律を許すものである。斯くて理由律は判斷にとつて最も大切な原理となり來るのである。

關係としての判斷は問と同一性質のものであつて實は未だ眞の判斷とは言はれない。判斷の本領は眞偽の決定をあらはす處に存する。ヘルバルトによれば主辭と賓辭との關係を問とし之に然り否の答を與へて初めて眞を意味する判斷となる

と云ふ。従つて diese Eintheilung (nach der sogenannten Qualität) ist die einzige den Urtheilen wesentliche; alle übrigen müssen als zufällige derselben nachgesetzt werden (I, 94. Vlg. 470f.) と言ふことが出来るのである。眞なる判断或は命題 (Sätze) の超個人超作用なるは云ふ迄もなし für die Allen so wie für uns, — und am Himmel wie auf Erden, — wahr sind und bleiben (VI, 161) 即ち超空間的超時間的に眞理であるのである。而して斯くの如き性質の判断の、ボルツァノの眞理自體と類縁あること云ふ迄もあるまじ (Bolz., W., I, I, 113) 夫れでは此『性質』即ち然り否の決定は何に基くのであるか。普通には直ちに外界實在に訴へるのであるが、夫は *ist* と云ふ繫辭を以つて存在を現すと見るものである。然るに存在は賓辭たる能はずとカントの既に説けるが如く、判断に於ける繫辭は決して之を實在的意義に解してはならない。しかすれば判断の眞僞を客觀實在に訴へて決することゝなるであらう。之れ批評哲學に教へられたるものゝ是認し得ざる處である (I, 92f, 94, 104ff)。問の決定はたゞたゞ Überlegung der Begriffe nach ihrem Inhalte (I, 96) によるのみである。『性質』として判断の Rechtsgründe は實在物にも作用にも求めてはならぬ、概念内容即ち意味の世界にのみ尋ねべきである。然しヘルバルトの説明は夫れ以上に出て居ない。若し此決定が A 及 B の別々の概念内容に存すと云ふならば、曩きの

關係としての判断の見方は無意義となり終るであらう。夫れで私は此決定としての判断の根據も矢張り意味の世界に成立せる system であらねばならぬと思ふ。即ち理由律は茲にも働いて居るのである。

斯くは言ふものゝ、ヘルバルト自身は自同律矛盾律に就て比較的明白に説明を下して居るにも係らず (H. SOE.) 理由律に對して實は少しも積極的の説明を試みて居ない。彼はライブニッツの *De principe est celui du besoin d'une raison suffisante, pour qu'une chose existe, qu'un événement arrive, qu'une vérité ait lieu* (Vlg. Leibnizii opera philosophica, herausgeg. v. E. Erdmann. S. 764f.) と云ふ定義を引用し、*pour qu'une chose existe, qu'un événement arrive* の第一第二の意義が實有概念因果概念を混ざるを難じて居れど、之を純粹論理的意義に解すれば如何なるかの説明は施して居ない。又第三の *qu'une vérité ait lieu* に就ては *entweder leer und nichtig, oder sie führt auf die schwerere Frage: wie eine Erkenntnis, aus sich herausgehend, eine von ihr verschiedene begründen könne?* と評し第二版にては之に附加して *Dort (Metaphysik), und nicht hier (Logik), haben alle diese Fragen ihre Stelle* と説き論理的意義の理由律を論理學の埒外に置かんとする氣勢をへほのめかして居るのである (H. 82)。單に表面にあらはれたる言説に基いて判断すれば、Für Herbart blieb deshalb die

Logik eine regulative Wissenschaft, welche lediglich die Formen für die Bearbeitung der Begriffe festzustellen und in dem Princip der Widerspruchlosigkeit ihre höchsten Norm aufzustellen hatte (Windelband, Logik. s. 184)。斯うした考方を徹底せしむれば、賓辭の數量化によつて一切の判斷を外延方程式と變じ、ホップス、コンディヤックに初まりペンザム、ハミルトンによつて確立した論理學の算術化に到達するか (Vlg. Liard, Les Logiciens Anglais Contemporains 1878) 或はアヌヌマン、ランゲの試みたる論理學の幾何學化に結着する外はあるまじ (A. Lange, Logische Studien 1877)。然しヘルバルトの論理學は單に自同律矛盾律のみに基く Rechnen mit Begriffen と一言に評し去ることの出來ない主張言説が多い。ロツキの Herbart gebührt das Verdienst, die Wichtigkeit dieser in aller Praxis der Wissenschaft offen vorliegenden Verfahrungsweise (d. i. $A+B = C$, Salz vom Grunde) in den Gesichtskreis der formalen Logik gerückt zu haben (Lotze, Log., 89) と言ふ讚辭が如何なる所依に基くものか、私の讀みたるヘルバルトの著作には直接之に該當する箇所を發見しなかつたのであるけれど、ヘルバルトの立論の内容より推せば、此批評の方がキンデルバントの夫れよりも遂に正鵠を得たるに近いと斷言し得るのである。彼の論理の完成者と言はるゝドロイビシが理由律を論理的原理の最

初に擧げたことも一の傍證とするに足りるであらう (Drohsel, Neue Darstellung der Logik, 1886, 5A, 1887, S. 63ff.)。但しヘルバルトは矛盾律と理由律との中孰れを重んじたかと言へば前者をと答へぬばならぬ。關係よりも關係の項を、判斷よりも概念を原本的と考へたる彼としては、さう行くのが當然の歸結である。

以上を要約すれば、第一に、總て論理的對象は夫れが概念にもあれ判斷にもあれ必ず非實在的非心理的である、作用や主觀を超越し超時間的に妥當する。第二に、彼はホルツァに先ち命題自體眞理自體表象自體を言葉は異なれど實質上説いて居る。

第三に、此實質的眞理實質的妥當の超越を主張する立場よりして、自然に論理的形式の内容に對する價値を低視するに至り、形式は單に規整的意義を有するに過ぎぬと見る傾がある。第四に、妥當界を支配する原理としては矛盾と理由律を主なるものとする、而して就中矛盾律を重んずる。第五に、判斷の本質を「關係」と「性質」の二つとし、中にも後者を以つて最も主要なるものとする。自餘の「分量」や「様態」の區別は第二義的と見て居る。

超越的客觀的意味の世界に對立するものは、ヘルバルトにあつては、先づ第一に所與の世界である。所與界の研究は全く特殊科學(歴史をも含む)の任であつて哲學は

少しも之に干渉してはならない。此意味に於て科學は *Sein* の學であり、哲學は *Sosein* の學であると云へるであらう。彼の論理學及實踐哲學に對しては斯様に解釋して毫も不可ないのであるけれど、彼の形而上學は *Realen* の學であるから、此見方に異論が起るかも知れない。然し私はヘルバルトの *Realen* は、夫のラッセルの *the world of being* 卽ち *they (= universals) subsist or have being, where "being" is opposed to "existence"* as being timeless と云ふ時の *universals* と同一カテゴリに屬すと見るべきではないかと思ふものである。(B. Russell, *The Problems of Philosophy*, p. 155ff.) 唯ヘルバルトの形而上學は論理學の場合よりも一層矛盾律を重視するの餘り、ラッセルの所謂動詞的前置詞的普遍的者を認めずして名詞的形容詞的普遍的者を説き、*Qualities* の世界を重んじて *Relations* の世界を退けたる結果、一種の *Monadism* を稱ふるに至つたのである (Ibid., 147ff. Vgl. *Windelband, Einleitung in die Philosophie*, 1914, S. 57f.)。斯くの如く見て來ると彼の形而上學も非常に論理的認識論的性質を多分に帯びたる者となり、ロツェの形而上學に對する類縁の鮮からぬを想はせられるのである。然し此點は本論文の主題外に屬する部分でもあるし尙私に研究の精しからざる處もあるから、單に一箇の憶説として述べるに止めて置く。次に所與の概念の論理的方面を捨象したる作用の方面は、最

も純粹なる意義に於て妥當界に對立する實在界である。作用即ち心理的者は總て時間的變轉的存在である。而して之を表象作用の一元に還元して其數學的測定を試みたのが有名なる *Vorstellungsmechanismus od. Statik und Mechanik des Geistes* である。之よりも私共にとつて興味のあるのは、彼が心理的意義の概念即ち作用は、其内容として論理的意義の概念即ち對象を持たねばならぬ、然らざれば作用の區別も性質も判明しないと説いた點である (VI, 163ff.)。之れ超越的意味の内在化、即ち對象と異別しての内容を示唆するものではあるまいか。尙ヘルバルトによれば、論理學のみならず實踐哲學形而上學にても常に對象を作用と嚴別し、作用は總て心理學の領域に一括し、哲學は單に對象の方面のみを探究すべきものとなつて居る。茲からして彼の實踐哲學にては徹底せる價値の客觀化が行はれて居る (I, 125ff., 217f. 第八節參照)。斯く見て來ると純粹存在の學は心理學であり、之れに對立する純粹妥當の學は哲學であると云ふこととなるであらう。普通の科學の對象とする實在は論理的に云へば第二義の實在或は實在と意味との合成果を其儘受入れたるものであると云へるであらう。尤も作用も夫が對象に對する關係即ち内容を併せ顧みなければ其性質判明しないのであるから、心理學は純粹存在のみの學であるとは云はれぬ、精密に言

表はせば純粹存在と内容との學であると云ふが正しいであらう。今茲に此推定を充分に立證する程に深入りすることは出来ないが、少くとも彼の論理學を基點として其心理學特殊科學に對する關係を顧みる時は、右の如き解釋の決して單なる推定憶説ではないことを斷言し得るのである。夫れでは斯る客觀的妥當説は妥當説一般の發展史上如何なる地位を要求するものであるか。わけても吾ロツツエの妥當説に對して如何の意義を有するのであるか。

七

ヘルバルトの一般妥當説發展史上に於ける旨趣は、彼がカントに向つて加へたる修正と轉向とによつて規定される。之れより其最も顯著にして有意義なるものに就て考察して見よう。先づ第一に擧ぐべきは、先驗統覺作用意識一般を *Gründe a priori* より捨象することによつて一切の心理的主觀的者を論理的者より追放し、思惟作用と獨立無依なる純粹認識對象を確保せる點である。個人的主觀に對して超越すれども超個人的主觀に對しては内在するカントのアプリアオリは、ヘルバルトの手によつて初めて如何なる意味に於ても主觀を超越するものと想定されたのである。

價值的視點を事實的視點より、認識論を心理學より獨立せしめ、前者の純粹性を擁護するに急なる現代論理主義者が、ヘルバルトの此斷乎たる反心理主義徹底せる客觀主義に注目し來り、彼の功績を承認するに吝かならざるに至りしも偶然でないと思はれるのである (Husserl, *Logische Untersuchungen*. 2A. Bd. I. S. 215ff. Rickert, *Zwei Wege der Erkenntnistheorie*, S. 195. Lask, *Lehre vom Urteil*, S. 23, 178)。

第二に注意すべきは眞理問題の中心を形式的眞理より實質的眞理へと移動せしめたる點である。カントにあつても具體的眞理は先天的形式に盛られたる内容即ち先天判斷であるけれども、彼の批評的研究の重心は、眞僞無差別の内容をして眞ならしむる *Conditio sine qua non* 判斷の普遍必然的なるや否やを検する *Problestein* 約言すれば認識形式の方面に置かれた。此意味に於てカントの確立せる妥當界は形式的眞理の世界であると云ふことが出来る。勿論彼にあつて形式的眞理と云はるるものは、單に矛盾律に背反せざる底の分析的眞理でもなければ、普通に形式論理にて説かるる判斷や推理の形式でもない。在來の形式論理の無效を看破して別に先驗論理即ち對象的論理を樹立したカントの意味する形式は實質的對象的たることを本領とし、其形式的眞理とは綜合的なるを本來の面目とすることを想はねばならぬ。

彼の最も深刻にして精細なる研究彼の劃期的なる所以は主として茲に存するのである。然し彼の問題とする方面の依然として真理の形式的側面に限ることは周知の事實である。彼は *das allgemeine und sichere Kriterium der Wahrheit* を討ねて之を内容に求む可らず偏に *die Uebereinstimmung einer Erkenntniss mit den allgemeinen und formalen Gesetzen des Verstandes und der Vernunft* に發見すべしのみと説きた (Kritik der reinen Vernunft, herausgeg. v. Valentiner. S. 112f.)。即ち彼の確立闡明したのは *die negative Bedingung aller Wahrheit* (Ibid., S. 113) 或は *das Formale aller Wahrheit* (S. 315) に限り内容其者に對しては何の Probesteinをも提供しないのである (S. 113)。カントの先天判斷と後天判斷とを區別せる第一視點よりは、容易に超越的妥當界に實質的真理を認定する思想の生じ來り得るにも係らず彼は之を以つて寧ろ批評の當體とし、私の所謂第二視點に立つて専ら其形式的消極的條件の究明に力を致した(第五節參照)。彼によつて大凡そ眞なる認識の備ふべき條件の性質は明にされた。然し此條件を備ふる認識、即ち形式によつて改造され之に盛られたる内容の特質は、説いて未だ悉されざるの憾みがなideではない。たとへば改造を受けたる後の内容と夫れ以前の内容との相違とか前者と主觀又は作用との關係如何と云ふ如きは其一例である。直接所與形式以前の

素材の主觀に内在する感覺的存在であるとは分明である。然し之が感情や悟性の形式によつて改造され眞理の内容となれる後に於ても、依然として感覺的存在的性質を保留するのであるか、或は質を異にして概念的妥當的性質を帯び來るものであるか、一箇の重大問題たるに係らず、カントにあつては不明である。(恐らく彼の意は前者にあると見るが正解に近いであらう)。又カントが感性によつて與へられたるものを悟性によつて考へると説き、更に進んでシェーマによつて兩者の仲介を試み、非常に深い研究をなして居るにも係らず、其所謂考へられたる内容の思惟作用に對する關係は矢張り曖昧なるを免れない。今認識の對象をば主觀や作用より抽象して其純粹客觀性に於て見る時は、是等の難問は一先づ一掃することが出来る。即ちカントの意味にて形式に盛られたる内容(實質的眞理)は、作用及主觀を超越するもので、被改造の内容は勿論妥當界の一員と見られるのである。直接所與の事實としての此花と *das Gedachte* としての此花とは全然所屬の世界を異にする。物と物を内容として有する眞理とが截然異別される。かくして事實的視點と價值的視點とは最も徹底的に分袂することとなるのである。又被改造の内容の主觀や作用に對する關係も對象のみを問題とする限り其超越の側だけを見て自餘は論點外として閑却し

て差支ないこととなる。之れ實質的眞理を説くヘルバルトの客觀的妥當説の強味である。然し翻つて考ふるに、客觀的妥當説も單に認識對象を究むるのみで足れりとする譯には行かない。必ずや謂ふ處の超越的對象が如何にして吾人の思惟作用によつて把握され主觀に内在するに至るか、*logische Genesis*をも併せ討ねなければならぬ。此對象認識の問題に當面し來る時は、カントにとつての難問は彼等に對して尙一層大なる程度の難問となつてあらはれ、一度退けたるカントの認識作用を顧みての深奥なる研究、就中彼のシニエティスムスに學ぶべき處多きを悟るであらう。ヘルバルトは此問題をば心理學の課題として全く純粹論理の埒外に退け無雜作に通過したる爲めに、單にカントに對する強味の方面を示すに止まり、實は茲に彼の妥當説の最大弱點の伏在することを暴露するに至らなかつたのである。

實質的眞理の形式的眞理に對する眞の優越は、對作用對主觀の側よりは、寧ろ其自體の中に内在する。詳しく言へば認識の對象の *bloße Form* なくて *Form + Inhalt* でなくてはならぬことを明示した點に存する。カントは主觀に對立し之れに服従を強要すと思はれたる實在的對象をば、對象性即ち對象可能の一般的條件と轉釋することによつて、其コペルニクス的回轉を成遂げたのであるが併も斯くして確立せられ

たる認識對象は、實はラヌクも説く如く Gegenständlichkeitscharakter an den Gegenständen であつて Gegenstand はなす (Lask, Logik der Philosophie, S. 30)° 彼の研究の妥當論史上至大の意義を有することは言ふ迄もないけれど、併し單なる對象性を論定するのみにては未だ認識對象の本質を究め悉くしたりとは云ひ難い。彼の對象的形式は内容を俟つて初めて單なる形式たるの難を免れ、彼の統一は雜多を得て初めて虚しき單一と異別され、彼の普遍的者は特殊的者を得て初めて空しき共通の者と差別される。單に形式的眞理を論定するのみにては、ein blosser Verhältnissbegriff たるに過ぎずと云ふボルツァノのカントに對する論難は、甘受せざるを得なす (Bolz, W., I, S. 138ff.)° 然ればカントの立場に立ちて對象性の論理的形式なることを認めても、尙對象は形式プラス内容であると主張しなければならぬであらう。勿論斯くの如く考へて來ると、超越的實質的對象界に於て更に形式と内容と云ふ如き區別が立し得るものであるか否か、立し得るとすれば其間の關係は如何に考ふべきか、立し得ずとせば妥當界の統一連關は如何にして可能であるか、など云ふ客觀的妥當說一般に通ずる大問題が續出して來る。茲に妥當說發展の契機が伏在して居るので、客觀的妥當說は是等の問題に對する態度の異別に基いて種々相を呈し來るのである。ヘルバルトに於

ては是等の問題は未だ問題として意識されて居らぬ。彼の新は超心理的超實在的な認識對象の實質的眞理なることを明白に論定したる點に存するのみである。されば其成果より云へば決して大と言ふことは出來ない。唯其洞見が後の妥當説の開展に對して歴史的に大なる旨趣を有することを注意すべきのみである。

實質的眞理の超越は、カントの所謂第一視點を徹底せしめ普遍必然性を嚴密に考ふることにより開展し來るもの、彼の立場に留まるも尙容易に認容し得る處である。されど進んで未だ眞僞の別なくして併も普遍必然的なる『關係としての判斷』即ち命題自體の如きを説くに至つては、カントの妥當説を根本的に新なる方向に轉向せしめしもの、ヘルバルトの妥當説の最も異彩を放つ部分であると思はれる。之れ吾人の注目すべき第三の要點である。カントにあつては、客觀的即眞理的であつたが、今や兩者必ずしも一致せず、非眞理的にして併も客觀的なるものが嚴として妥當界の一員たるに至つた。客觀的妥當者は必ずしも *Wahrsein* でなくて、單に意味を有するものと同一義になつた。領域の擴大が性質の變容に伴隨して將來されたのである(第五節參照)。而して此方面は後ポルツァノ、マイノング、フツァール等の客觀的妥當論者の手によつて極めて精細に徹底的に開展せられ顯著なる一特相となつた。然し之

を妥當說の眞の進歩と見るべきや否やは人々の立場によつて評價必ずしも一ではない。カントより出發し批評哲學の忠實なる(論理的の意味にて忠實なる)開展者たることを標榜する人々は、如何なる意味に於てか對象界を眞偽の標準と相即する見解を固持し、極めて徹底的なる客觀主義を説くも尙此命題自體や不可能的對象を許容するを肯じないこと、ラスクに於て見る通りである(Lask, *Logik*, S. 40ff.) 評價は異なるでもあらうが、此方向への開展轉向が妥當說一般を考察するに當つて閑却するを許さざる重大問題を提出すると云ふ一點に至つては、何人も異議を挟む餘地がないと思はれる。同時に之が起點を興へたるヘルバルトの洞見には、少くとも歴史的旨趣の重大を許さなくてはならないであらう。

* * * * *

以上の三點はヘルバルトのカントに對する轉釋の内、一般的にして旨趣の最も大なるものを列擧して見たのであるが、之れに比すれば一層局部的の修訂ではあれど、後の妥當說わけでもロツツェに對して關係の淺からぬ三四の點を明にして置かう。先づ彼の純粹論理は、カントがアリストテレイヌの手にて完成し夫れ以來一步も進歩せしむることが出來ぬ(K. d. r. V. S. 22f.)と酷評したる形式論理に限り、其研究範圍の

極めて狭少なるを注意しなければならぬ。然し彼が之に哲學的學科中最初の地位を與へ獨立自全の意義を認めたのは、形式論理の取扱ふ問題が、カントの言ふ如く無雜作に退け得ざる重要なる旨趣を、哲學一般に對して有することを看取したからである。即ち時間・空間・因果律等を研究する前に、一般に思惟の對象となり得るもの如何なる性質を備ふべきかの論究がなくてはならぬ、對象の特殊規定に先立つて純粹論理的對象が確定されねばならぬ、先驗感覺論の前に純粹論理學が説かれねばならぬのである。彼も恐らくカントの批評を以つて *eine von Kants hierarchischen Sünden* と評せるボルツェノに同意し (Bolzano, W., T. S. 40) ラテン語に *Phit-à-dieu qu'o'n la Lo-signe poussât a quelque chose de plus qu'elle n'est encore* (Leibnitz, *Nouveaux Essais*, Liv. VI, chap. 17, p. 399, *Ibid.*) と言はんと欲する一人であらう。次にカントが形式論理を以つて全く矛盾律のみに基くと見るに反對して、明説しては居ないけれど、之れと並立的に理由律を認めたことは、ロツェも云へる如くヘルバルトの大なる功績の一である。最後に『關係』と『性質』との二つを以つて判断の本質を規定するものとなしたることも、カントの判断論に加へたる大なる改善の一と見做すことが出来るであらう。之がロツェを通してキンデルバンツト、リッゲルトの判断論へと開展して行つた徑路は、興味ある題

目たるを失はぬと思はれる。

* * * * *
 擧げ來れば、ヘルバルトが其論理學に於てカントに加へたる修訂開展は、量に於ても質に於ても、輕々に看過するを許さざる底のものあるを見るのである。抑も彼は何處より此洞見を獲來たのであるか。斯く問へば何人にも直ちに想起せらるるは、ライブニッツの「モナドロジ」である。ヘルバルトの哲學がライブニッツの夫れに負ふ處の多きことは周知の歴史的事實であつて、彼の論理學を初めとし形而上學も將又彼の勞作中最も秀れたる部分と云はるる心理學迄も、大概ライブニッツの復活又は繼承として叙述されるを常とする (Windelband, *Geschichte der neueren Philosophie*. B. II. 5A. 1911. S. 396. Klemm, *Geschichte der Psychologie*. 1911. S. 109, 28f.)。然し此歴史的關係はヘルバルトの地位と價值とを高むる材料となるよりは、寧ろ彼がカント哲學の洗禮を受けながら精華一時に競ふ獨逸唯心論の時代に於て、奇怪にも批評哲學以前の獨斷的形式而上學偏局的主理論に復歸するの無謀を敢てするものとして、却つて地位低下價值劣視の一資料に供せらるるの觀がないではない。特に彼が論理學及形而上學に於て概念の仕上げを行ふに當り、矛盾律を最高原理とすと解せられたる爲めに、其ラ

イブニッツに對する關係も恰らヴォルフの夫れに似たるものと見られ、愈々其價値の疑はるるに至つたのは、彼の爲めに悲しむべきことと云はねばならぬ (Windelband, *op. cit.* S. 402. *Einleitung in die Philosophie*, S. 87f.)。さあれ嚴密なる學としての哲學を要求する聲の強くなり、客觀的妄説の深意の一般に初めて理解せられるにつれて、彼の純粹論理も漸く其受くべき評價を受くるに至りたる今日に於ては、彼のライブニッツに對する關係は自づから異りたる光の下に新釋される必要があるであらう。私を見る處によれば彼の反心理主義排作用排主觀説を初めとして實質的眞理超越の說、判斷(命題)自體の論乃至純粹論理の重視に至る迄、彼のカントに向つて加へたる轉向開展の要旨は、直接間接にライブニッツに獲たる處甚だ多いと思ふのである。ライブニッツの哲學全體の基本は其論理學にあると云ふことが、近來のライブニッツ研究者の探究精査の結果到達せる合致の結論である程に、彼の哲學には論理主義のモメントが多々であるけれども (B. Russel, *A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz*, 1900. p. VIII, § 7. *Couturat, La logique de Leibniz, d'après des documents inédits*, 1901. p. XII. *Cassirer, Leibniz' System in seinen wissenschaftlichen Grundlagen* 1902. S. 532.) 併も亦彼の論理主義は直ちに形而上學乃至神學と握手しモナード論と親密に結附いて居ることを忘れてはならない。

彼の論理を形而上學より遊離せしめ彼の形而上學を論理化することは、批評哲學の精神を會得し之を通過したる後に非ざれば、(不可能ではないけれど)極めて困難の事業である。上にヘルバルトがカントをライブニッツによつて轉釋したと言ふた意味は之を精密に表現すれば、ライブニッツをカントの光に照らして論理化し、逆に此論理化されたるライブニッツによつてカントを純化進展せしめたと云ふのに外ならない。約めて言へば、彼の客觀的妥當說の歴史的由來は、カントに基くライブニッツの論理化と云ふ一句を以つて之を悉くすることが出来る(尙此點については第十節に於て細論する)。而して此ライブニッツをカントに論理的に結附けると云ふ洞見は彼の客觀主義の所論と共に、一方ボルツァノの智識學開展の根本方針を規定し、他方ロッツェの論理學に至大の影響を及ぼしたと私は推定するものである。

其徹底せる反心理主義論理的客觀主義に於て、ヘルバルトがボルツァノの先驅者たることは改めて論ずる迄もない。又ボルツァノの表象自體・命題自體及眞理自體の説が、ヘルバルトの概念論及判斷論に於て先取されて居ることも前既に説いた通りである(第七節參照)。惜しむべし、此貴重なる思想はヘルバルトにあつては、直ちに純形

式——論理的圖式の研究に轉向せられ、遂に其開くべき華を咲かせずに終つた。之れが豊富精細なる開展はホルツァノを俟つて成就されたのである。彼は客觀的妥當の創設者ではないけれど、依然として其頭目たるを失はない。惟ふに其斯くの如くなるを得たるもの、一には數學に就ての彼の深くして廣き研究に負ふ處鮮くないであらう(H. Bergmann, *Das philosophische Werk Bolzano's*, Anhang. Beiträge zur phisichen Grundlegung der Mathematik, S. 155 ff. Palágyi, opt. cit. S. VI.)。之れと共に又他面夫が彼のライブニッツに就ての細心緻密なる研究に負ふ處の淺からぬことは、彼がボヘミアのライブニッツとよばれ、或はライブニッツの形而上學を論理化せる最初にして最大の哲學者と言はるるによつても察知せられる如くである。然るに此ライブニッツの論理化てよことは、彼に先立つて既にヘルバルトの試みたる處である。さればホルツァノは第一に其反心理主義に於て、次に其眞理自體實質的眞理命題自體表象自體の説に於て、最後に其ライブニッツの論理化ての洞見に於て——約言すれば彼は其知識學の根本思想に於て、ヘルバルトに負ふ處があるではないかと想像されるのである。而して私は此歴史的關係の實は單なる想像でなくて、殆んど確定的事實として立言し得ると思ふものである。第一に彼等の反心理主義が同一前提に基いて主張されることに注意す

べきである。ヘルバルトが思惟作用及認識主觀を純粹論理的者の世界より排斥したのは、之を心理的時間的存在と見たのに因る。ボルツァノが眞理自體と考へられたる眞理、命題自體と考へられたる命題、客觀的表象と主觀的表象、命題と判斷、眞理と認識とを嚴別したのは、皆 Denken = Daseyn, Subjekt = psychisches Wesen と解したのに基く (Bolzano, W., I, S. 76ff., 112ff., 154f., 163f., 216ff.)。斯くの如き見方に依つて、カントの先驗統覺作用意識一般を解釋することは、實はカントが實在の根據に擬したる自覺の眞義を逸したるものであると私は思ふのであるが、彼等は斯く見たるが爲めにカントの主觀的妥當說を客觀的妥當說に轉向せしめたのである。次にボルツァノの眞理自體命題自體表象自體の説がヘルバルトに負ふことは彼自身其近似を明白に認容して居るので推知される (W., I, S. 85, 93, 227)。第三の點に就ては、ボルツァノが自說を確むる材料として彼に合致反對の古今の學說を煩しき迄に引用するに當つて、常にライブニッツとヘルバルトとを同一カテゴリーの下に自說の味方として並列的に引用せるを見て之を察知するに難くないであらう (W., I, S. 85, 92f., 226f.)。斯く見來れば彼がフイヒテ、セリング、ヘーゲル、ショーペンハワー等に酷評を下したるに反して (Bergmann, opt. cit. 4ff.)、獨りヘルバルトに對してのみ、屢々 der tiefstnige Herbart (W., I, S. 30, 233 etc.) と稱して敬意

を拂ふに吝ならざることの、偶然に出でたるにあらざるを悟り得るであらう。之を以つて單に彼の形式論理的嚴密の爲めと解するは皮相の見たるを免れなす(Uebeweg-Osterreich, Geschichte der Philosophie IV, 11A, 1915, S. 161)。而してヘルバルトの客觀的妥當説及其ライブニツに對する洞見がカントの主觀的妥當説を俟つて初めて可能なることを想ふ時、殆んど有ゆる點に於てカントの正及對に立ち之に最も鋭き批評を加へたる、ボルツァノがカントに直接負ふ處、單に分析判斷と綜合判斷の區別と云ふ如き末節には止まらず、却つて實は其根本思想を彼に獲來つたのであると斷ずることの果して過言であるであらうか(第四節參照)。私はボルツァノ知識學の思想源泉として、カント及ヘルバルトの占ある地位が、ライブニツの夫れに比して決して劣らないと信ずるものである。(然し之が立證には尙一層精到なる研究を要すること言を俟たぬ。今は唯一箇の憶説として提出するに止めて置く)。

八

ヘルバルトがカントに對して施したる轉釋開展の方針を繼承し、更に一層之を精細に開展せしむると共に、他面カントの精神を復活しヘルバルトの捨てて顧みな

つた認識作用の *Leistungs* の側をも併せ考察し、以つて妥當說發展史上に一新生面を開いたのはロツツェである。彼も或意味に於て客觀主義者である。ヘルバルト程徹底的に反心理主義を稱へず、切要なる點に於て心理主義に讓步せる處さへあるけれども、彼の意向は飽迄も論理を心理と區別し、價值を發生と嚴別し、對象を作用と異別するにあること疑ふ餘地のない處である。進んで個人的主觀を超越し其自身に妥當する命題即ち實質的眞理の超越を説き、更には其眞理の構成要素として作用と區別されたる表象内容を言ふあたり其思想の實質上、論證の仕方上、彼がヘルバルトの客觀的妥當說に負ふ處の大なる蔽ふ可らざるものあるを發見するのである。唯彼のヘルバルトと袂を分たねばならぬ所以は、彼にあつては論理的者の究明は對象と共に作用をも顧みなければならぬ、客觀的と共に主觀的をも考へねばならぬ、楯の兩面を探りて楯そのものの眞相を把握し得るのであると云ふ深い省察に依るのである。彼が論理學第一篇純粹論理に於て、對象を作用と異別するの切要を縷説し乍ら、他面常に對象把握としての作用、作用の *Leistungs* を考察する用意を怠らないのは此故である。而して第三篇認識論に於て、妥當する命題自體を説けども、ヘルバルトの關係としての判斷を許さざる、——而して終に意識一般此語は用ゐないがを以つて對象と作

用との窮極根據となし主觀的妥當說に立脚することを宣明せる皆此故である。今もしヘルバルトに對する關係を主にして言へば、ボルツァノが之を徹底せしめたるに對して、ロツツェは之を補完したのであると云ふことも出来るであらう。一層精密に表現すれば、ロツツェはヘルバルトの客觀主義を止揚力素としてカントの主觀的妥當說を開展せしめたるもの——換言すればカントを主にして之とヘルバルトとの綜合を企てたるものと言ふべきであらう。されば彼がヘルバルト學徒とよばれることに斷乎として抗辨したのは至當のことである(*Streitschriften*, S. 15 f.)。彼が明白にヘルバルトに受けたりと思はるる諸點に限つて見ても彼の創意と開展とは單なる一箇のヘルバルト學徒として彼を數ふべく餘りに多大である。歩む途こそ異なれ、此點頗るボルツァノのヘルバルトに對する位置に似て居る。併も亦彼がヘルバルトに負ふ處の彼自からの意識するよりは遙に大なるを拒むことは出来ない。其如何なる所依に基くか少しも説いて無いのであるけれども、リッケルトが *Der Einflus Herbarths, ist, wenn Lotze selbst ihn auch nicht für gross hielt, nicht zu verkennen Rieker, Wilhelm Windelband 1915, S. 20* と評したのは、動かす可らざる鐵案であらう。私は之れより少しく詳細の點に立ち入り、彼がヘルバルトを如何に採用し、如何様に之を進展せしめたかを

討ねて、見ようと思ふ。

第一に、彼の妥當する命題はヘルバルトの間に對する決定としての判断と同一當體を指示し超越的實質的眞理を意味して居るけれど、之を判断と言はずに命題とよぶ命名が既に一の改善である。ヘルバルトも命題と言はぬではないが判断と言ふた場合が多い。而して彼は之れを作用と嚴別すべき旨を力説して居るけれど、判断と云へば直ちに判断作用を考へさせられ易い。其客觀的意義を表明するものとしては命題と云ふの遙かに優れるに如かないのである (Bolzano, Wissenschaftslehre, I, S. 154f. Rickert, Gegenstand der Erkenntnis, 3A, S. 255ff.)。又ヘルバルトは右の實質的眞理としての判断の一般特質を概説するのみにて、直ちに全稱肯定判断特稱肯定判断全稱否定判断特稱否定判断等の形式論に移つて居る。然るにロツツェは之をプラトンのイデア論に結附けカントの先天綜合判断に連關せして其一般特質を詳らかに論究せるのみならず、進んで之を $\alpha + \beta \parallel \gamma$ の圖式に表はし、 α なる連結の項と β なる連結其者即ち雜多と統一との相互關係を説き、更らには其連結成立の Rechtsgründe を探究し、夫がカントの範疇なる可らずして synthetische Grundsätze a priori なる可らざる旨を切論せるは、到底ヘルバルトに發見し得ない處である。(Log., Buch III, Kap. 2, 4)。第

二に右の如く連結の項たる表象内容又は概念は疑ひもなくヘルバルトの論理的意義に於ける概念と同一物であるが、ロツツェにあつては其性質及び種類がヘルバルトの夫れに比べて著しく鮮明となり且つ徹底して來た。先づ性質の方より云へば、ヘルバルトは概念も判断も共に妥當すると言ひ、妥當てふ語を用ゐたるに係らず、之を無差別に無思慮に使つて居る。然るにロツツェは妥當を眞なる命題に限り、概念には *Bedeutung* すと云ひ得るのみと説きて、明白に其意義を限定し、更らに妥當するの意味するとの關係をも説明した。尤もロツツェは他の學語たとへば *Wirklichkeit, sachlichreal* 等の使用に於て屢々見る如く、此場合に於ても自からの定義通りに用ゐて居ない場合が多い。即ち彼は概念や表象についても妥當すると言つて居る (*Log., S. 15, 509*)。然し後に至つて之は *nur mit halber Deutlichkeit* に轉用したるのみで、正しくは『意味す』と言ふべきことを斷り、明かに自己訂正を行つて居るので、其意義に惑はしき處が生じ無きのである (*Log., S. 521*)。種類の方より言へば、彼は命名 (*Nennung*) や感覺や知覺や *das Zwar, Dennoch* と云ふ如きものにも、對象と作用との嚴別すべきを説いて (*Log., S. 15ff*)、ポルツァノの精細なる表象自體の説に近づき、トワルドウスキーを先取し (*Twardowski, Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen, 1864*)、又 *Ausdruck* に就ても文法的方面と心理

的方面と論理的方面とを明別細論して (Log. § 67) フッサールを先取せる如き、到底ヘルバルトに見ることの出来ない處である。而して第三に作用をも顧みる彼の立場よりして、ヘルバルトに示唆されたるに止まる作用と内容と對象との三者の區別をば、命名感覺表象を初めとして命題判断に就ても遂行したるを見るに至つては (Log. S. 16f, 514f. — Wirklichkeit des ansichgiltiger Satzes, Wirklichkeit des Gedachwordens, Wirklichkeit des Daseins) 彼のブレンタノ派(トワルドウスキール、フッサー)への影響の、ボルツァノに比して左して、劣れりとは考へ難いのである。さればロツツェはヘルバルトの思想を繼承し之と同一線上に立つとしても、其進程開展の甚大なるを認めねばならぬ。第四にロツツェの純粹論理中最も特色あり現代の論理學に對して非常に意味あるものと見做されて居る判断論が、就中ヘルバルトに負ふ處の多きことは否み難い。即ち彼が判断の第一本質として *Relativität* を、第二特質として *Qualität* をあげ、其他の區分は副次的なりとしてカントの判断論に鋭き批評したる點 (Log. § 31) 又凡ての定言判断は假言判断に於て其眞面目を發揮すと説ける點 (Log. § 36f) 最後に判断形式を初めとして一般に論理的形式の *subjektive od. formale Bedeutung* を有するに過ぎたることを指摘せる點 (Log. S. 64f, 553f.) — 何れも既にヘルバルトの説示した處である。然し茲にも彼は單なるヘル

パルト學徒たるに甘んずるものではない。彼の如く眞偽未分の單なる關係としての判断を許さないものにあつては、同一の判断が必ず『關係』と『性質』との兩者を具すとせねばならぬ。而して彼は兩者の中『關係』を以つて判断の根本的本質をなすもの(Log., S. 59ff, 63 ff)、『性質』は之に加はる Nebenmtheitと見たのである(Log., S. 61 ff)。此點の見方に就てはキンデルバントはロツェに近く、リッケルトは寧ろヘルバルトに近い。此事實は兩人の學說の相違點を理解するに當つて有力なる手がかりとなるものである。定言判断を假言判断に歸する理由についても、ロツェの精細透徹なる論證は、ヘルバルトの夫れと同日の談ではなす(Log., B. I. Kap. 2, a, b)。又論理的形式や思惟作用が主觀的形式的なることを認めつゝ、夫が結局 sachliche Bedeutungを獲來る所以をも概略乍ら論證を試みた(Log., B. III, Kap. 4)。第五に彼も亦ヘルバルトと同じく妥當界に行はるゝ法則として矛盾律と理由律の二つを並立的に認め、併も之が統一的説明を試みて居ない。而して彼が矛盾律を以つて連結の項 a と b を項として成立せしむる根據とし、理由律を以つて連結其者 \circ を成立せしむる根柢に擬して、大體上兩原理に異る權能領域を認定した點も、既にヘルバルトに其萌芽を見る處である。然し進んで此二原理の間に不可分離の交渉あることを切論し、之を單なる表象内容の措

定について迄も論證したる點、兩者の中理由律が矛盾律よりも客觀性に於て優越するを詳論したる點などは (Log, S. 34ff, 75ff, 58ff, 572ff) 單に論理の細くなつたと云ふばかりには止らない。實に妥當界其者に於て重點の置き處がヘルバルトとは正反對になつたことを示すものである。即ちラッセルの語を借りて言へば、ヘルバルトには qualities of universals が首位を占めたのが、ロツツェに於ては relations of universals が首位を占めることゝなつたのである。之れはヘルバルトの妥當説に加へられたる一大改善であると思ふ。約めて言へばロツツェはヘルバルトと異りて認識作用の側をも併せ顧みるだけに、一般に議論の仕方が精細にもなり、問題回避と云ふやうなことも尠くなつて居るのは當然であるが、全く同一思想にても、彼によつて目ざましき進展を遂げて居ることは、上來の略説によつても大凡そ察することが出来るであらう。

論理學のみに就て言へば、ロツツェのヘルバルトに對する關係は先づ右の如きものである。彼のカントとヘルバルトに獲たる方面を大雑把乍ら一括して評すれば、認識對象の問題に於ては、より多くヘルバルトに負ひ、對象認識の問題に於ては、より多くカントに負ふと言ふてよいであらうと思ふ。

*

*

*

*

*

*

*

*

私は本論文にては便宜上主として論理的妥當に就て研究して居るのであるけれども、之を廣義に解すれば妥當するものは獨り論理的理論的命題には限らない、善美の價值に就ても妥當すと言ひ得ること明かである。ロツェも既に、倫理的理想が人間に對して妥當する、實踐的教義命令が妥當すると云ふ如き使用法をなして居るのであるから(Gründzüge der praktischen Philosophie, 1880, 3A, 1899, S. 7, 31) 彼にあつても廣義の妥當一般の内には善美の價值をも包攝して差支ない。否、實を云へば三者の間には本來極めて緊密なる關係が存立して居るのである。さて彼は當體的妥當の説に並行して善美の價值の客觀的實存を主張した。而して彼の妥當説が作用を顧みて立論されてある爲めに、徹底せる客觀主義より見て尙幾多の不純なる主觀的要素を残留せしめて居るのに相應して、此價值の客觀化にも、價值自體を説く人の眼には、多分の主觀的心理的要素を混入せしめて居るが見えるのである。彼が必要以上自己の所論を裏切る程度の心理主義的偏執に捉はれて居る部分は別として、猶其外に客觀主義者の眼には心理主義的と見られる部分が多い。然し或意味に於て彼は矢張り客觀的價值論者と見て差支ない。(朝永先生—ロツェの史的位置、ロツェ第四十三頁以下、藤井先生—ロツェの倫理學、同書第二百二十三頁以下參照。然るに此價值の客

觀化と云ふ方面に於て、當體的妥當の説に於けると同様に、彼の先蹤をなし彼に影響したと思はれるのはヘルバルトである。茲にも私はロツツェ妥當説のヘルバルトに負ふ處あることの強き傍證を見るものである。

ヘルバルトは實踐哲學を論理學の次、形而上學の前に置き、眞理の問題と善美の問題との間に親密の關係あることを豫示して居る。而して論理上あれ程徹底的なる客觀主義を説いた彼は、價值論に於ては更に一層徹底せる客觀主義を稱へたのである。彼に従へば哲學は所與概念の仕上げであると云ふ。然らば實踐哲學は抑も如何なる仕上げを行ふものであるか。論理學が所與概念を明晰判明にし、形而上學が之を補充(ergänzen)するに對して、實踐哲學は其内に ein Zusatz, der in einem Urtheile des Beifalls oder Missfallens besteht を招致することを目的とする(W., I., S. 48f.)。所與の内に招致せらるる添加物とは、絶對的無制約的にして原本的直證を有する客觀的美客觀的善(das objektive Schöne, objektive Gute) を意味する(W., I., S. 49f., 124f.)。夫は吾人に對して Gegenstand der Beurtheilung としてあらはれ、豫ての實踐的判斷の絶對的標準となる處の Musterbegriffe, Ideen oder Werthe である(T., S. 124, 127, 128)。所與は此客觀的價值を吾人に表象せしむる機縁を與へる(vernunft)と云ふ以外には、之に對して何の關係も無い

のである(1; S. 49)。彼は尙一層其特質を鮮明且つ嚴密にあらはす爲め、之を動もすれば之と混同され易き他の三種の概念と比較して、其間に存する根本的相違を縷説した。第一は *das Nützliche und Angenehme* である。彼等は *Vorziehen und Verwerfen* と云ふ評價の方面に於ては價值と類似の點を持つて居るけれども(S. 125)。夫は全く個人的主觀の轉變的心理状態(zeitlich wechselnder, zufälliger Zustand, S. 126)瞬間的現在の感情(angebliche Gefühle, S. 127)に依存するものである。價值は之に反して不變恒存的對象として(*als einem stetigen, und sich gleich bleibenden Gegenstande, als etwas Bleibendes von unlängerem Werthe, S. 126, 128*)無制約的に(*unbedingt, S. 128*)實存する。即ち前者が相對的轉變的實在的なるに對して後者は絶對的不變的超實在的であると言ふのである。次に彼は價值を *die Reihe der Erregung, subjektive Gemüthsstände* と嚴に切離して考察する必要を切論し之と混同する時は價值は *gegenständlich, objektiv* たることを失ひ危険なる主觀主義に墮する恐れあることを述べて、茲にも明白なる反心理主義排主觀論を稱導した(S. 125ff., 129)。善美の價值が吾人に認知感得されるには快不快と云ふ如き心理作用による外ないことは云ふ迄もないけれど、併も此故を以て兩者を混同又は混淆してはならない。發生の問題と價值の問題とは論理學に於てのみならず、實踐哲

學の場合に於ても等しく嚴に區別して考へねばならないのである(S. 131f.)。されば彼は言ふ *Hat man nun vom Subjektiven nicht abstrahirt: so wird man in den Erregungen die Principien der Aesthetik suchen; und sie deshalb verfehlen* (S. 132)°。然しヘンペルトの價值論上の客觀主義の最も徹底せる相は、之を規範概念とさへ異別すべき要あることを主張せる第三點に於て看取することが出来る。價值を規範と見るのは之を主觀に關係せしめて考へて居るのである。如何なる意味に於ても主觀と關係せしむることを厭ふ排主觀的客觀主義を高潮する結果は價值概念より規範概念を捨象すると云ふ處迄到らねば已まないのである。此點に於ては彼は論理學を尙 *die Moral für das Denken* (Lehrbuch zur Psychologie, § 180) と解して之に規範的職分を認めたるよりも其價值論に於ては更に一層徹底せる客觀主義に立つものである。彼は善の價值に就て之を説くに曰く *Die Frage: wie es zugehe, und in wiefern es möglich sei, dass ästhetische Urtheile den Willen bestimmen und ein Gewissen erzeugen, . . . diese Frage gehört nicht in die Aesthetik, sondern in die Psychologie. . . . Aber in theoretischer Hinsicht ist sie (die erwähnte Frage) solange, als man sich selbst mit Aufstellung der Principien beschäftigt, — eine Nebenfrage, diemna rsuchen muss zuentfernen. Denn die Evidenz der ursprünglichen Urtheile über Lößliches und Schäßliches . . . wächst nicht und nimmt auch*

nicht ab, of sich nun ein Wille nach ihnen richtet oder nicht. . . . die praktische Anwendung ist ihnen (Prinzipien) zufällig. 又 (S. 50-51)° 美的價値に就ては、Ferner ist bei Seite zusetzen, was sich auf den Standpunct des Zuschauers, als Bewunderers oder Kritikers bezieht, der in letztern Falle Vorschriften, Imperative, aufzustellen unternimmt. 又云ふて居る (S. 125)° 更に他の箇所にて總じて美的價値に imperative Form を裝はしめ、之れより Regeln を牽き出すことは、客觀的價値を心理的主觀的領域に引下すものと難じた (S. 131E)° 規範的性質の捨象を主張しても、まだフッサールの theoretische Disziplinen als Fundamente normativer (Log. Unters., I, 2A, S. 30E) に論じた程に細く又徹底しては居ないけれど、其意向に於ては同一轍に出でて居ると思はれるのである。斯くの如き客觀的價値論がロツツェに於て如何様に變容して受入れられたか、夫は今の問題とする處ではない。要は此點に於てもロツツェのヘルバルトに負ふ處多きことを示して、論理的妥當說に於ける兩人の歴史的關係に、間接乍ら意義淺からぬ證據を提供すれば足つて居るのである。

* * * * *

Werth 及 Gelten と云ふ學語を現代哲學に重用せしめる端を開いたのはロツツェであると云はれて居る (Windelband, Principien der Logik, S. 53. Misch, Einleitung, S. LXI)° 然し其

中『價值』と云ふ語は、ヘルバルト實踐哲學の中心觀念を表現する語として數多く使用されてあるからして、之をロツェの功にのみ歸するのは不穩當であらう。其教育學心理學を以つて可なり久しい間學界を風靡したヘルバルトは、定めし價值と云ふ語をも一般學界に弘通せしめるのに與つて大に力あつたことと想像されるのである。『妥當』と云ふ語はロツェによつて初めて意識的に確定重用された。此點は事些末に似たれども實は大なる功績である。然し此語も亦ヘルバルトの論理學を初めとし實踐哲學形而上學に於て可なり頻繁に用ゐられて居る。其使用法もロツェが不用意の際の使用法即ち判斷のみならず概念についても之を使ふのと大體上同一である。而して彼の論理の大成者と云はるるドロービッシの論理學に於ては、此語は殆んど頁毎に再三再四用ゐられて居る處より推せば、『妥當』『妥當的』『妥當する』と云ふ語の數多き使用は或はヘルバルト學徒に共通の特徴かと想像されるのである。然しヘルバルトにあつてもドロービッシに於ても此語の意義を限定し之を以つて彼等の學說の中心觀念を表現する切要語となす迄には至らなかつた。思想をあらはす適切なる用語を確定重用せしめたる功は主としてロツェに歸するが正當であらう。然し更に一步を進めて考ふるに Objekt 及 Objektive Gültigkeit と轉釋し Objektive Gültigkeit d. i. Be-

ding-ungen der Möglichkeit aller Erkenntnisse der Gegenstände(Kr. d. r. V. S. 143)と解釋せるカントは思想に於けると同じく言葉に於ても亦妥當說の第一人者たる實を有して居るではないかと思はれる。カントは之を名詞形容詞動詞の形にて屢々使用して居るのである。之れによりて見れば單なる用語の上にてさへ、ロツツェ妥當說の源泉の奈邊に存するか略推測し得られるのである。

* * * * *

ロツツェの自から辨ずる通り、彼を哲學に向はしめたのはヘルバルトでなくて、詩歌及び藝術に對する強き傾向であつたであらう。此傾向に促されて彼の先づ向つたのはフイヒテ、セリング、ヘーゲル等の情理併せて満足を與ふる浪漫的唯心論であつて、乾燥無味なるヘルバルト哲學ではなかつたと云ふのも事實であらう。彼をヘルバルト學徒に數ふる者に斷然たる抗議をしたのは、彼として如何にも正當のことである。ヘルバルトの著作を讀めば其分析の鋭さに驚き其明快なのを憚ぶけれど、酌めど盡きせぬ深さ、究むれど涯し知らぬ大さを缺ぐの憾みがある。彼によつて眞理の海に船を乗入ると云ふ程の感激を湧立されることは、先づ困難のことであらう。然し一度船を思辨の波に浮かした後に於ては、たとひ其學說の乾燥無味なるを厭ふ

も、其嚴正精密なる論理の指示する處を拒むことは出来ない。榮華の頂天より落魄の奈落へと直下した哲學の運命を吾身にしてみれば味はつたロツツェ、何處迄も目的觀的理想主義に愛着すると共に機械觀的自然主義にも否み難き強請を感じたロツツェが、此内外二面の要求を満足せしめん爲の形而上學的思辯考察の道程中に於て、ヘルバルトに與へられたと云ふ *die fruchtbare Fermente des Nachdenkens* (Streitschr. S. 6) は、單に形而上學の領域だけに働くに止まつたと云はれまい。彼は此醱酵母の働は *entscheidend für mich* ではなかつたと云ふ。然し體驗の益々深からんことを求むるが爲めの故に論理の愈々精しからんこと欲したロツツェが其論理學的沈潛集中の進程中に於ては少くとも、彼自らの意識せるより遙に深く且つ強く、此醱酵母の能體に負ふ處あつたと推定しても決して不當ではないと思ふ。又彼は自らの形而上學の主要想源としてヘルバルトの擧げらるるを拒み、寧ろ之を物理學及ライブニッツの「モナドロジ」に獲たと云ふ。併し彼が此ライブニッツのモナードの世界に這入るに當つて、ヘルバルトの示唆に負ふ處ないではなからうと云ふことは、次の一節に依つても推測される。 *was endlich die allgemeinere Ausmalung der Ansichten betraf, so ging ich in der That lieber durch das prachtvolle Thor, das er (Herbart) selbst seiner Metaphysik versichert zum Eingang anbahnen gekon-*

nt zu haben: das Thor der Leibnitzischen Mondenwelt. (Steitschr. S. 7). 彼のライブニッツに獲たるもの獨り其形而上學ばかりではない。彼の論理學も亦其反心理主義其實質的眞理の説其判斷論等に於て「モナドロジ」に負ふ處尠くない。而して此ライブニッツに存する論理的力素の復活開展が亦、彼に先んじ彼と略々同一方向に於てライブニッツを轉釋せるヘルバルトの洞見に基く處なしと言ふことが出来るであらうか。茲に於て私は更に溯つてライブニッツの妥當論的契機を討究し、再び翻つてそのヘルバルト及びロツェに對する關係を闡明する必要があると信ずるのである。(未完)